本所中ノ郷竹町

万龍

黒川金治郎

曲亭主人著　溪齋英泉畫

開卷驚奇俠客傳

第壹集

天保重光單閼
羣玉堂精刊

本中之町四丁目
新川長麦郎

51-25

識讀如非

俠客傳第一集自序

書肆堂 分金

老氏曰大道廢有仁義仁義者道之異稱也而有似而非者故韓非比儒俠擯斥之曰儒以文亂法俠以武犯禁二者皆譏而學士多稱於世云夫俠之爲言彊也持也輕生高氣排難解紛孔子所謂殺身成仁者是已司馬遷及傳游俠其序援韓子且曰季次原憲閭巷人也讀書懷獨行君子之德不苟合當世當世亦笑之又曰今游俠其行雖不軌於正

義然其言必信其行必果已諾必誠不愛其軀赴士之阨困既已存亡死矣而不矜其能羞伐其德蓋亦有足多者此有憤激而言之是以其語厚而意深也斑固不原此意以其進奸雄譏之可謂誤矣今于彼書檢之則有延陵孟嘗春申平原信陵之徒皆卿相富厚之俠也至如閭巷之俠又有朱家田仲王公劇孟郭解數人自漢而後迨唐有劍俠有女俠小說所載不遑毛舉也

國朝自古必有其人在焉但無論記傳載之以余所聞近世有大鳥居逸平關東小六幡隨長兵及號茨城草袴白柄大小神祇者皆是閭巷之俠而其所爲或未必合於義啻立氣齊作威福結私交以立彊於世者也較諸古者道德之士不動聲色消宇內之大變者相去非唯霄壤而已然氣豪以此至捍當世之兇暴此戰國之餘習未改其私義廉潔以有然也使當時無此人則士風自是衰俠客

之義曷可少哉余有感焉而無所憤激不激不憤猶且傳俠客所以然者何也蓋以仁人抱道猶不免菑是故新田殂于足利楠氏陣歿湊河大凡此二公誠忠與日月爭光德義流芳而不旣惜乎枝葉不再振榮枯得喪與南朝終始矣是以世人不平以爲遺憾余之固陋不敢自料寧思欲排其難解其紛叨補舊記之闕文慢載野乘所未言演義立傳以快中人之心上若夫興絶顯隱非游俠則其事不

絜使人心愉快非寓言乃其談不博無財而能俠其俠此益奇也用滑稽善談罔不出人意表宜名不虛立書不虛行竊有賴于此又惡問虛之與實哉是書數十卷然後可以結局今茲所著才五卷是爲第一集其第二集以下應陸續刋行云浪華書賈羣玉堂與江戸書賈文溪堂相謀乞余之著三四年矣此塞其責者及刻成聊亦識歲月

天保二年端午前一日　曲亭蟬史撰

開卷驚奇俠客傳第壹集總目録

卷弐

第壹回　製青嚢著演購髑封白紙英直託孤君
第貳回　依遺訓賢童知跼蹐迎旅櫬義士憐母子

卷弐

第叁回　照黑夜螢火道海濱誇明察鼠輩被恥辱
第肆回　陰德入老郷得奴婢陽卜縁鬪鷄倡主僕

卷弐

第伍回　謁林住南將感舊縁演便宜老尼薦村酒

三

第陸回　福草村三兒奏奇功釀藥酒郡領詳來歴

卷四

第漆回　七里濱洪波洗衆惡千葉城土療埋潮毒
第捌回　啓衣箱小六得遺書救癲疾著演失銅斧

卷五

第玖回　郷士二遇癲病人光棍初懺悔舊惡
第拾回　相摸川小六視横死遊行寺著演葬須臾

第一集總目録終

本集起南朝元中九年至北朝應永十八年春秋大凡二十箇年小説第二集陸續刊行

野上史著演
豪侠氣節其名若雷
虚已博愛仗義散財
寡欲自守不容禍胎
至信共患旅槻得回
一堆枯骨初睡夜臺
空緘届處克保嬰孩
賛著演
ふぢさいの
藤澤晩稲
像賛第壹

たのみもすくなきを
名乃迹を
ゆくゑ
芸の原
賛英直
館大六
英直
客店目四郎
像賛第貳

脇屋右少将義隆
精忠三世傳近是君
南史雖絶猶有遺文
賛脇屋少将
藤白隼人正安同
像賛第三
畑六郎二時種
草ふかみひめうを
ぢくむ月の影は
海あめ入くむ
ぢくを流まとる
賛新田主僕
新田左少将貞方
像賛第四

千葉介
兼胤
順逆如岡人多捷天
巧恣權詐藥鴆仙
勢利資桀惡冠當年
皇天既定冥罰豈愆
茶ぶくの銭トの妙算
像替第五

たゝもあるやうれうあけまれのあろうかやうもあるものもの
賛小六並母屋
善彩堂
妹姫
母屋
館小六
助則
像替第六

俠客傳第一集列傳姓名目録

将相
新田貞方　脇屋義隆　足利満兼　足利持氏
上杉憲定　千葉介兼胤

武士
野上史著演　舘大六英直　畑六郎二時種　上泉秀武
鳥山七郎　船田小二郎　堀口五郎　江田藏人　高柳兵庫　藤白安同
田子剪傳二　荒海灘藏　荒海船藏　野上奴婢之助　舘小六助則

婦人
晩稲　母屋　信夫　女僧妙算

市人
逆旅主人肝八　姿鏡屋甲侠名字　紅粉阪小正二　臺町豬三太
相撲川筥高師侠名字　客店目四郎

奴隷
字六　画七　畑平　畔藏

通計三十有五名第一集姓名目録終

開巻驚奇俠客傳第壹集巻之一

東都　曲亭主人編次

第一回　青囊を製して著演髑髏を購ふ　白紙を封して英直孤君を託す

鹿苑院足利義満相國の將軍たりし。應永の年歳とふ。相模州高座郡藤澤道場の左畫頭の野上史著演と唱ふ。一個の郷士ありけり。その祖貫は尋ねふ美濃の野上の人氏なりけり。莊司著實と唱れしの源平壽永の間戰に東軍に從ひて兵粮運送の支を掌り。始終その功ありしが源氏一統の後鎌倉に召れ藤澤南郷の邊に莊園三千餘貫を賜り藤澤東西八ケ郷の目代を兼ねる。是より數世を累て今の著演が大父なりける。野上目著佐は後醍醐大皇の時元弘二年閏六月の鎌倉攻戦に新田義貞朝臣に代て兵粮運送れ

支えうけあらずその功あれども新田足利の確執より程もなく世人久しく思
賞の沙汰もなかりき剃南北両朝に立ちられあらず義貞朝臣の足利を陣攻のよ
ぎ竹ゝうべ若佐これをいと惜しき世を憤り退隠して遂に赤足利家の催促に従ひ
ぐれ鎌倉将軍の時より代々所帯不易の御教書を賜ふる御士なるを恨とも思ひ
なるべし世をいと安く送りけり その子村主若種生涯を病ありけるにより官途絶
絶へ只読書をのみ支とす戦国の稀なる博士なりけれども好く人の師となるべ
素よりその名を貪らざれば人の知らざるものもあるべし年六十ゆゑ分まりつ その子八史若演
なり若演は総角より文を学び武を嗜む心ざし父祖に劣らず既に壮年に及び比二
親の喪に在ること三年ばかりなれば儀を常にその妻晩稲に忠臣草命の時
なり孝子の終身の喪あり二年なる今は在さずとも豈一日も忘れんや且俺大久を当初
新田殿に従ひ参りて南朝の為に一臂の力を盡せり今は足利一統の世なり

ゆえとなりとて媚て栄利を求むるべき俺は只分を守り法度を犯さず不義に
與せず名利の奴となるまじきの世に恥るとなり原べと諭し鎌倉の管領
年始の喜儀を禁ずるを参仕することを欲せず況その方ざるべき權家に交るべきや
とぞ素より饒裕なれども常に施しを好む性にて侠気あり尚凶年に値ては
倉廩を開き粟を散じて里人の饑るを賑し救ひ豊年には赤路を造り
橋の朽るを修復して衆人の資とせり されのみならず大約郷邑の近郷の
家を焼れる或は世に洪水出て饑渇に逼り或は久しく病臥して妻子を艱に便着を
なれば底弱不具なる孀孤をのよるべきを親疎その差別なく米を贈り
錢を救せて必厚く恵むと幾人となく知らざるなれば境を隔て
名を偽りて居るとなり不幸なる世を渡り難きの折々木野山計り
告げしなれば その居所と姓名を質しに問ひその人別を永樂錢二百文と米五

弊を取るせけり。恁てもその日足らざるとき。西三回来ることありとも。その折毎に推辞むる。
るく形のごとくに與へ。ある人窃かにこれを諫めて。千仞の海に測るとも人の心の好悪は量
り知られぬものなり。名を汚し徳を傷へべし。速に救を乞ふべし。名も宿所も知れざる。
東西を取らせぬうちに人の及ぶ所行なれども。その中に搗鬼あり。然すれば国法免るべ
からず。恁てこれを誘へ。貪るこのうるさきを斟酌ゆるまりとて著演ちに
字を和殿の意見宜しからんと。俺も亦初めよりそを思ふ。かねども君子は嗟来の食を
受ざる。疑ふべき名を詔ねその居所を質すも問ひそうらぶ。施行の義は是ひとへに辱る
のみ。以て食悲人に妻子ある論ず。その人申諾あるのみ。世に幸ひ心飢渇ふ
る勝ぶ。此の救を俺に乞ふ。根穿り葉を欲ひ素生を問ふ。その人いそぐ去る。
はれ。この義を思ふ。東西を與へ。その名を問ひ。又ふのく虚実を此に拠金ふ
ところ。縱その人告ぐ。困窮者ふ。応ぶ。窃盗者ふ。応ぶ。その方をもて庇を受ぶ。窃盗者ふ

ふ。優志。俺に質素。日々。奴婢ぶ。使ふ。妻子ふ。鹿布を被せ。
身ふ。疎食を喫へ。義の為ふ。財を惜ま。親の箕裘を棄てふ。施を受ぶ
ぶ。一日も疎略ふ。せ。ことなれば。年々。荘園ふ。水旱の患ふ。人年来俺御の戰
場ふ。なりふ。ふ。もの。これ軍兵の乱妨ふ。ある禍ふ。あるを。施ふ。年来を歴れ
ども。然とて東西の竭ふ。せ。陽報ふ。れ。ふ。願ふ。ふ。天鑒ふ。ふべ。ふ。然ふ。ふ。
説諭せ。隷ふ。ふ。感嘆ふ。恥ふ。悔ふ。ふ。飽ふ。心地
やあり。有一日。杜佼。ふ。彼ふ。召聚へ。酒ふ。飲ふ。ふ。
擾乱ふ。近ふ。比ふ。五六十年。都ふ。鄙ふ。開戰絶れ。そ。戰場ふ。曝ふ。野
徑ふ。草萱を肥ふ。抑我憶力名ふ。ありけん。儂ふ。遠ふ。ふべ。就中ふ。使ふ。
名ふ。ふ。無武者。雄兵。矢石ふ。命を隕ふ。ふ。頭を捕ふ。ふ。ふ。その亡骸。杠
を還ふ。身方ふ。亦平ふ。れ。その白骨。路傍ふ。砂石。俱ふ。汚ふ。ふ。沙漠

今より小る髑髏をのこたるものあるを取めびとりそ来たり髑髏一个を錢百文と価を定めて買ふ人なる間なれば言語有一答なり。そのことを聞かれて衆皆一驚あるべし。そもそも鎌倉近御箱根以東這頁の満径うこの野遍地なる髑髏い病坊なる大糞ともまるるを買ふ人なるを。驛路遠く小荷駄の尻を赶て畑肥を攫んとて掙甲斐ある生活をなるべしとそのうるて仏と業引つ教びて人食共伴に退りけり。是よりて後彼此の髑髏を

のとあるものあれ著演必真鈔を最も且優れ書布に畫を難ずる。元復髑髏を据ゑ元件の畫を装ふとそなれ。ある邪社佞们い著演と相稱へ。禪を長者と唱ふ

しかるその前約を違ふとなるく多くの数を作善を感じとなく商ふ人なるの日毎に間断なるりけりいくこその髑髏の数一百級に及ぶ毎ふ著演これを瓶に飲て遊行寺人送り遣。豫て寺僧と相謀て寺内の閑を代そ元最大元なるを空くそこの髑

髏を瘞ること大凡一稔可きの程に一萬餘級に及びぬ。著演則その間に萬人塔と勒彼なる石塔婆を建て墓表とし。毎年住持に請きて大衆を聚合経を讀ませ水陸の施餓鬼を修行。且墓所料と寄進ること十里四方にあるとあらゆる戦死の髑髏いまの元渉獵畫けんの後い然る東西を誰もそ来ざるりーいど既にして著演の義名い江湖に高く聞えて遠近の貴賤の懷ひあり近く愛敬せざるものなし。現戦世に多くなる元俊傑なるけれども天道に盈るを虧るの理に満ちあり

著演齢四十に満ちて嗣育一個もあるりーいど妻の晩稲にてこの世に憂ひく歩たる。折に髑髏良人に薦めて子孫の為に侍ひる側室を娶りるべしとあるを著演に心ばせ然りとて已べたるるーねびるれもまるく薦めりと元著演頭をもち掉ひてそれ然ることを。渾家に妒のおろかなくこの接ることの賢女なるべい是よりて起るべ。やがて七十の箇條中の子なるに上るとのあれども一向に信ぶりーいど世に石婦のあるこを。男子ゆゆ小子

乱るゝを黄門とぞ云ふ。徒る人の必髭髭なく、足の脛毛の長く稀なる百婦を妻得て、夜毎に子種を持たるも生涯嗣無きが故に唐土の内官に成るべきの陰を割去るが如く、是も黄門と喚ばるゝ。那男子にして子なきは鍼経の明辨なる、又仏経の説く五種の黄門なり。凡て此類を名づけて扇搏半糧迦と云へり。載く大般若経に在りと雖も、願ふ俺身も黄門にして嗣なき過世の報に獨渾家を石婦とし、七去の罪を負せざるべし。俺が夫婦の宿願空しく、この侭にして後なく、大なる家を亡さんと歎くとなん。甲斐なきなり。無益なるべし。推禁めて後ぶべくもあらざりけり。話分両頭なる時、陸奥州信夫郡に渡瀬の間里に館大六郎英直と喚れる南朝餘類の浪人なる妻に名を母屋と云ひけり。原是新田の親族なりける大館氏の支流なり。父祖の時より義助（従四位下刑部卿）義治（従四位下式部大輔）父子に後と軍功あり。然れども功なくして大人に北国に戦殺し、父子四国に身を隠すけり。是より以降英直に義治の嫡子なりけり。脇屋右少将義隆朝臣に

義隆（義治の弟）は、曾祖父義貞の部（義則）に作る。又義隆作るべきなり。

仕へて、忠義の光黄泉に輝かるゝ。脇屋義隆は南朝の建徳二年に正五位下相模守に任ぜられ、その後天授二年に従四位下右少将陸奥守に拝任せらるゝ。陸奥国司なりけれども、当時這地に在任して再後父兄弟なる左少将貞方朝臣（新田の将義宗の弟）と共に侶に足利方の大敵と成りて、桃戦なること、年来を歴る程に、後亀山天皇の元中九年の秋の比、武家（足利氏）より吕の晋ん和睦を請勧めらるゝ。時の将軍足利義満、久しく大内義弘を吉野の行宮へ参らせて、北朝の當今（後小松院）を南帝（後亀山天皇）の御猶子に做し、且その次の日嗣の南帝の皇子をその御位に即けらんと頻りに奏し、まつりしかば、南帝宮も敢て御許容なりけり。その年十月に吉野の皇居を出させ給ひ、嵯峨の大覚寺に渡御ましまして、北朝と後亀の御契約を定められ、その年の月の初の五日に御譲位の義満まつりて、三種の神器を北朝に譲渡あり。是より後亀山天皇は新院と称し奉り、徒て中間一稔を歴るけり。應永元年の春

二月の廿三日に新院の先規の如く太上天皇の号を上られぬ。猶吉嶮峻の大覚寺を仙居に定めらるべけり。往る延元元年の冬十月廿三日に後醍醐天皇御ましまして武臣足利尊氏が皇恩を背き奉るを。吉野の臨幸すべきよし。後村上後亀山を。爰に御三世と聚ぶべきよし。五十余の七稔の春秋を歴る今の時に南朝北朝両天皇稍御合体まりぬれば麻の如くに乱れ世の是なる風波のたゝで長閑くあるべきなんと萬民歎じ思へども。武家足利氏をいふ者南朝の忠臣執奏深く憎む。剰太上天皇後亀山院の皇子を春宮に立奉らんと。綸旨ひとたび前約に叛くあるべきなんと南朝忠義の卿相雲客思ふ世義烈の武臣門に齊一緒憤りて或は山林に隠遁し或は孤城に戍して戰殺するもまたり。日に任れば新田楠の世に揆思魂義胆武勇智略を今はの旗を甲斐の国に自方に漸く落ち有敵ふれ漂ひ樹下に漏る雨繁くあるに。新田自方義隆の両大将せん徒に一圓道地を退

且く時運を俟んと。自方朝臣の残兵と百名ばかり後へ退路を投て落ぬ。義隆は残る士卒を三十名可ばかりて武蔵相模に隠れ。自方の勇士を聚へんとて。次安と宴を旅衣五万石七万石主従が引連れ。張の月も笠量に首途起光を包む王鉾のみちの奥をうすみぐ濁る世の田字草安積の沼にあやめ根ぬ。狩猟恨くろ鳥とりを倣まるに。婿竹のあの里を夜とあかし。暗に出るひけり。時に應永六年の秋九月とぞ。その時やはり右少将義隆の郎君五才にて陸奥に遣れぬ。這郎君の母上は亦是新田の氏族。大館左馬頭氏義の女弟。郎君の外祖父にて大館左馬頭兼伊豫守氏明は。当初新田贈中納言義貞卿の隊に属して特に武勇の誉あり。惜むべし。興国二年暦応三年の夏六月年二十八にて。任国豫州に陣歿しけり。その嫡子上総権介氏宗は。正平七年北朝文和の秋九月年二十七にて。本国上野に卒しぬ。二男大館左馬頭氏義は。初名を弥三郎とぞ。

左
賑嘯壞古骨
豪俠言做仁
右
旅ごろもれば根のかよ
のりの入くすし

その後叙爵して従五位下右馬介に補せられ天授二年（和元年）の秋九月軍功賞として従五位上に昇進し左馬頭に補せられる。大抵武略の達人なる義隆朝臣に共伴し陸奥に在りて武家の大敵と戦ふと屢々なり。中に天授六年（康暦二年）の冬の比流矢の為に傷られる。金瘡竟に命を奪ひ了ぬ。年三十九なり。卒せけり。然れば氏宗氏義胞兄弟の大父なり。

大館二郎宗氏主元弘三年（建武三年）夏五月新田殿義貞の麾に属して鎌倉を陣殺せしより父祖三世忠義抜きがたく南朝のために為に始終死力を尽せり。勇将なりしも夢の世や皆是迄餅とあり果て郎君の為に一も後見なければ若き横郎君の母上に産後の病着肥立ずして五穏前に世を逝ぬ。今に父君の将に折を勢究りて往方も定めぬ落涙のみを繰訪ふのみ軒端の松風箕子の下に鳴く虫なり外に絶て音のみ。獨大六英直は大館氏の庶流なれども忠臣なり貳の心なりければ郎君生れ給ひし比より英直を傅られて妻の母屋を郎君の姑母に委せられけり。是のみにあらず義隆四十一の歳に郎君生れ給ひ俗に四十二の二歳児なれば乳子の二親に幸あらざるを俗に忌べき義隆朝臣の義に據て郎君の祿の中より大館氏を冒らしめ英直を見もとよりとて乳名さへに英直の俗称に因て小六丸と名つけ給ひけり。恩義由緒ある主従なれば義隆武嶽へ落ち給ひ折英直夫婦を召近つけ給ひ。俺今自方の為に武藏を捨て卜ひけるに那首とても敵地に入れば安危を越料しがたし。故に稚児を携へて使ひ所為なりとても武運蹉くに由なく父子一所に斃れるべく遺恨なるべし。汝は這地に留まり迹を埋め貌を変じ小六丸を守り育よ。今一番の伴れ合を先途を看たらんとの遺言を宣ふ。家の系図と重代の菊一文字の名刀を英直に預けぬ。是より英直は妻の母屋共伴に小六丸の冊を姓名を変形貌を窶し関と渡瀬の間なる字を楫鎖と冷邑を偏小なる白屋を購求め僅に勝を保ぶ。郡語に坐して食へば山の空に壁を論ず偏に貯祿とも

郎君生れ給ひし俗に四十二の二歳児なれば乳子の二親に幸あらざるを俗に忌べき義隆朝臣の義に據て郎君の祿の中より大館氏を冒らしめ英直を見もとよりとて乳名さへに英直の俗称に因て小六丸と名つけ給ひけり。恩義由緒ある主従なれば義隆武嶽へ落ち給ひ折英直夫婦を召近つけ給ひ。俺今自方の為に武藏を捨て卜ひけるに那首とても敵地に入れば安危を越料しがたし。故に稚児を携へて使ひ所為なりとても武運蹉くに由なく父子一所に斃れるべく遺恨なるべし。汝は這地に留まり迹を埋め貌を変じ小六丸を守り育よ。今一番の伴れ合を先途を看たらんとの遺言を宣ふ。家の系図と重代の菊一文字の名刀を英直に預けぬ。是より英直は妻の母屋共伴に小六丸の冊を姓名を変形貌を窶し関と渡瀬の間なる字を楫鎖と冷邑を偏小なる白屋を購求め僅に勝を保ぶ。郡語に坐して食へば山の空に壁を論ず偏に貯祿とも

ヨスがらねば。英直ハ箭竹を磨き。母屋ハ糸を繰りなどして。細き烟を立れども。猶東西定らぬとぞうちへに英直に一個の女児ありて。名を信夫と喚做しける。小六丸と同庚にて。今茲五才になりけり。母屋が乳傅に召され。比より乳母して守せしに。英直が小六丸に倶して府城を落る時。女児信夫が乳母に身の暇を取せす。今ハ主従親子の差も左右にして育て年稍七才になりし秋。城隍祭の試楽の日に信夫ハひとり外に出しまゝ人拐されけん。往方もしらずなりしかバ英直母屋ハ驚き歎き。日を歴るまで彼此と遂ひ隈なく索ぬれども。竟に據もなかりし。忠義の為にハ身を捨て。君の為に親子の情をも忘るべき。深き滞世にあれバ。小六丸と英直の家子とも人に告て。苟にも主従のごとくならず。小六丸も成長の後に至るまで。然とハ素生を知らしまゐらせんと思ひけれバ。何事もなく歳月を歴るに随ひ。小六丸ハ英直親子を。実の親と女弟と思ひとりて。時々に信夫がことを思ひ出て。涙に袂を濡しける。稗き身にも孝友に賢しかりし。英直母屋ハ。尾まで泣さへ止まれど嶋

通鳥。なる浮世の瀬いたりける。艱苦の中に年闌て。応永にも既に十年になりし。小六丸ハ年も稍九才になりしかバ。去歳の春より英直ハ生活の暇ある毎に手習読書を教なるに。行儀正しくありけり。その性怜利なりけれバ。一を聞て二三を知る。才貌ハ賢才あるのミならず人権せども驕らず。又かの子路が武勇あるべき後漸しかりけれバ。英直夫婦ハ歓しくぞつゝ心にひそかにゆくゆく。主君ハ少将のうへなりけるが。五稔になるまで御本意をとげ給ハバ。いづれの里かの蟄伏れてかりまゐらんと思へども。然とて訪ねべき由もあらバ。其方の空をなたに詠め眺つらしつゝ不楽なく在けるに。今茲三月の下浣。織吹との風の音信あり。義隆朝臣ハあの年来武蔵相摸の間に世を潜びて。旧恩ある武士男卒を招集めしに。今世につれ勢ひ微ければひて義に仕ふる道を守るの稀なる。歎にも毛を吹き疵を求るものありて。身を遠慮と旅宿をかへ立て。光陰を送りつるに。去歳より相摸の唐子村なる。某甲の許に御座して。猶可ハ腰痛の病痾ありて。起居自由ならずなりにける。六十年あまり陸奥の戦場にて落馬

せしとありけるゆ。今その撲傷の癒りしをんん湯治せば宜しうんとそ年来左右ゆ役ひまつ
ゆ。船田鳥山高峯井江田堀口などと喚れる。近臣繞ゆ丹右衛門ゆて密謀ゆ貌姑峯井麗路
る。底倉ゆ赴きぬ。姑く湯治あるべしとその方ざるとう消息しと綽々詳ゆ多々。然程ゆ
英直ゆとの音耗をゆてしよりゆ左きゆ右ゆ右皮膚ゆ病者の撲傷ゆ癒ずゆ。
程なく癒りゆ然とも老少不定の世と倘その温泉の相応しゆ鼓舞せゆ。
脚を嚙むとあるべやゆ言ゆ癒ゆ。豫て仰異ゆ御諚ゆ違ゆ郎君ゆ倶
しなりゆそ相摸ゆ赴て御容體を伺べく。今ゆ大ゆうゆ郎君を伴ゆ
るゆ優とあるゆと。尋思ゆ母屋ゆ帰ゆ。猛可ゆ逆旅の准備ゆ整へ小六
丸ゆ八ゆの里の住りゆ。さゆ皆共侶ゆ相摸ゆ親族許赴くゆ。ゆ縁ゆて却里人ゆ怪々と
ゆを述別ゆ生ゆ。家具雑具ゆ悉ゆ家ゆ售て緩ゆ主従夫婦繞ゆ三名最
慌忙しく首途ゆ。相摸を投ゆ。そゆけゆ。却説館大六郎英直ゆ妻ゆ母屋と共侶ゆ小

六丸を扶掖てその日ゆ大路町一里七八里を走ゆて躯ゆ宿を投め。稍三四日を経る程ゆ折ゆ肆
月の初旬ゆあるれゆ。天寒ゆ。夏ゆ暑ゆ。馬ゆ尾笛ゆ追ゆ蠅ゆ千里ゆ。ゆ去向ゆ
長ゆ日ゆ。睡癖ゆ早百合ゆ花珍ゆ。開初ゆ野里ゆ注連結ゆ種御ゆ。ゆ蹠ゆ厚
薄ゆ山ゆ新樹ゆ朝曇ゆ降ゆ。ゆ鶴ゆ集ゆ方遠ゆ。ゆ快過ゆ吸子
鳥ゆ。ゆ夫婦ゆ慰ゆ尚総角ゆ初旅路ゆ。ゆ武蔵ゆ渋谷ゆ
郷を過ゆ。ゆ英直ゆ猛ゆ胸膈ゆ疼ゆ。ゆ心地ゆ。ゆ夜ゆ假
名川ゆ。ゆ宿ゆ投ゆ。ゆ初ゆ母屋ゆ箇様ゆ。ゆ飲
下ゆ。ゆ此ゆ効験ゆ。ゆ小六丸ゆ。ゆ馬ゆ。ゆ枕邊ゆ
ゆ足ゆ。ゆ背ゆ。ゆ程ゆ夜ゆ。ゆ明ゆ。ゆ時ゆ母屋ゆ逆旅ゆ。ゆ主人ゆ
人ゆ病者ゆ。ゆ生ゆ。ゆ醫師ゆ。ゆ醫師ゆ。ゆ人ゆ躯ゆ。ゆ醫師ゆ。ゆ
遣ゆ。ゆ来ゆ。ゆを述ゆ。ゆ療治ゆ。ゆ醫師ゆ。ゆ英直ゆ。ゆ容

体を巨細に詰て却退て母屋に入る。丈夫なの月比大く心労たるとも有つらん。病症心痛也。霜露の恙に耐われば。一町も歩行を忌べし。癈る日も逗留と名る閑なる看とりあひそと耳に聞く方薬を吹咀して復た来めと宣く然程に母屋に宿の尼盧を借りて。薬を煎り良久に薦め。小六丸も心ざりに側を去て慰めつ。六七日を歴ても程に英直に絶えんとせし。病苦聊退て夜も日も呻吟るぞ哀れ一夜日に半碗の粥を啜るのみ。けり。然るに旅に悲しきのみに痩児の杖笠前向の肩と凝み一人に草枕慣に旅宿に病臥て。羸痩と氣力の衰へ就に臨て妻子に心の憂ひを遺る方絶て。ものの半月目睫も甚敵。暁に母に杜鵑も不如帰と鳴くとりはへと適も。れも陸奥に遠く来ける悔しさ。神に生仏に願甲斐あり夏樹枝鎮守の神社へ両個と迭代に戦回りの。熟る朝夕の雑音の雪と。花も長沿景に斑消て立玉ぬ兎月も既に晦途くれり。比鎌倉より来りとて。旅客の人々に譚ふを。重紙戸隔る這方の夫婦に心とも。程に那旅客の人に。脇屋に将義隆主に。年来相摸る所親許深く潜びて。知ける。近曽恙れ。従者絶に四五名と。俱に貌姑峯の麓路る。底に君に赴くと。程に鄰郷の人氏る。藤白棚九郎安同と。吸て武士の。敷の准備と。その男の隊兵の。土兵野武士に。招取て百四五十名。迎梅雨降に。夜に紛れ暗歸と定め。生料と推寄来る。義隆主の。浴室の四下と。捕笛に。吐と揚る。朗の声。姑く鳴を。静まて。馬乗。棚九郎。四下に。御音く。声。苛めく。宮方の。浴人る。脇屋義隆快出に。鎌倉管領家の。御諚に依て。鄰郷。熊野の人氏る。藤白棚九郎安同。ヨメ勢と。以向に。遺る。逃る。兵。と。呼る。声と。共。侶に。疾。一。競に。寄。隊。軍。兵。倒。一戸を打破て先と。争。三十名。不。晉。七。二。十。一。稠。入。る。義隆主の。近。侍。船田小二郎。鳥山七郎。堀口五郎。江田。高柳。彼。五。君。過。れ。熟。客。人。臣。勇。士。の。必

死の覚期に此も騒がず。ただ随ふ手に大刀を抜駿し。稍ハ敵を破仆し駆散し
艘を靡けて。此を先途と戦ひける烈しき修煉の刀尖に向ひしもの。誰が免まじ眞額を剃て首
車斫鎌のそ蔓を芟るごとく瞬間に二三十人鮮血に塗れて輾ぶもあり。両個に成て伏もあり
枕を並べ斃れけり。ゆゑれ寄手ハ視も餘る大勢なれバ物ともせず。自方の屍骸を踏踰て
叫ぶ直攻に前をし自方に遮られて後より比皆弓に箭刺て透間もなく射かける矢柄今
降る雨より繁く。烏夜に晃めく鎗長刀ハ雲間を洩て月よりも限なかりける。太當艘を突戦
何当果べしとも見えざりけり。然れども衆寡の勢ひ入鐵石にあらざれバ然しも一人。當千に船
田鳥山江田堀口高梛們ハ一個となく數人所深痍を負ぬもなければ。是迄なりと思ひけん近つく
敵と引組んで刺違へて雨夜の星となりぬ。一歩も去らで戦歿なりけり。勇く得がたき勇士なりき。
有侍程の義隆主出居の杉戸を盾にして用心の為枕に建たる角弓会て差詰引詰
敵十四五名射て仆しぬ。箭種も竭んとせし折に近臣們の皆斃れしかバ。諦めて退て腹を
切らんと獨語て臥房を投て入るを藤白が見るけるが甲子勇傳次佐と見て鎗を拾く
跟き来る耶と声被て刺んとせしを義隆閃りと身を反し蜂巻左手に掴ミ曲者を透さぬ右手に
拔合せる刄頭をさし入て舌を撃ち落せバ寃鬼違へる勇傳次ハ胸前丁と斃れ串れて苦と叫びし声
と共に仰反仆れて息絶けり。その間に義隆主ハ奥なる一室に退きて腹掻切て俯ふる最
期ハ本月廿四日（應永十年 夏四月）の真夜中比の事にして享年四十九歳と嗚呼痛しかる哉世ハ名
将閑朝殿陸の武臣なりしもヨア年の大義時至らで命運其処に竭ぬれバ藤白運が鉞
軍慮に攻悩されて弗腹を斫るるこそ無慙なれ然程に藤白棚九郎安同ハ隊勢に下
知して脇屋殿の御首級を賜らせ其の餘近臣五名の首級も知るるものハその名を尋ねて
一箇ごとに牌を付首函に斂め相携へて次の日管領の御館へまゐりて候ふよし告げし
當主鎌倉の管領足利満兼朝臣（氏満の子基氏の孫）斜ならず歓びありて躬て首級実検ありて却
棚九郎に宣ふやう義隆ハ朝敵たり且當家累世の讐なれば早く裏に陸奥を浮落

鞍根山さをあり
庭倉藤白撃石皮將
城口五郎
名白柴七郎

有りと聞え比より後とそく徃方を索れども更に知るよしなかりしに安同輙く討捕て
せし身神妙なりとの義京師へ注進に及びし日室町殿も大くに御満足ありて思召れ
田の功賞として安同ふれ氣賀底倉二ヶ荘を賜りけるが又隊兵にも功ある者は感状を賜ふ
べし今よりの本府に在住して忠勤を励むべしとみづから仰下されければ棚九郎は身に餘
る恩を拜して退出ける程に又その次の日に義隆主従の首級共を由比の濱邊に梟られ
しを唱目前に於て來その爲体は語く云むかし野間の内海にて義朝主の殺されし
又その御子孫頼家卿の伊豆の修善寺にて絞られしも這回底倉にて義隆主の殺されしも
皆浴室にて在れば源氏の大将達の二箇なから浴室をもて死所にあるも不思議の因
あるぞなと寝ながら説話を相宿の外の哀れを知る者皆ふ一調高く訛声に雨宴時旅宿の
憂遭人の愈欲なりと応へて嘆息の外なかりしを洩聞く母屋は初より頭顱擡し良人
と倶に敲る耳裏く胸の内や苦しき泣声を立じとて袂を噛締る袖に涙の玉露散ぬ

了ことまで知らぬ小六丸さへ義に聴ければ快らぬ世の轉変に拳を捻る懐に英直は堪へ
かねし愁歎遺恨に腸断ぜ忽地に胸塞りて一ト声高く叫びつゝ血を吐くて纔く仰ざまに
撲と倒れしかば母屋はじめ小六丸もあな什麽らんと驚騒て抱起しつゝ呼活るに主
人も走り來つ共侶に勤で人を醫師の宿所へ走らせ召来し薬を勧め(?)に由断る
ければ英直は些ばかり息出て主人と醫師に歎びを述て些く氣も慰めて枕に就ども
左ても右ても本復べくもあらぬ程なれば臆られぬ随にその通宵ひそかに久後の深念をもて右少
将ぬし義隆主の御武運微く殺されまししと聞えしに俺も亦命終らば誰かは又郎君を守冊し
類育せん新田の餘類と知るもの後ち殺を捕んとかのものと思ひ一下日も宿を致…
るりしを…藤澤は野上史大著演と喚れる最も饒裕なる郷士あり性に有
かくて家僕に義を守る城の如く悪を憚む仇の若く弱を…
施を好みて財貨を惜まず其性とそく侠氣ありて勢利に肆権家に諂ぎ…

鄰郡近御る。戦死の髑髏一萬餘級を集めて塚を築き好事を修行し給ふ者の
咎言を聞くと雖も知る人も知らぬ人も多くの世ふて小六殿を託すものの那人なるぞ亦あり
べしと思ふ。俺あの年来縁をけれども二回の交りあるを。俺身の死後に至りて書を寄せ
て便宜を図り給へ。何とかぶ術もれ。いふ也べしと思ふ難く左さの右さの尋思せば、僅ふ
紙を書状のごく巻笹竜でぶ。墨汁の筆を拔今て野上史殿まゐる。
新田の餘類館大六郎英直と申す。夢ふ標寫し果て。息吻あへぎその封状を枕の下へ
布んとす。思ひ撲地と臥こりけふ。怠ぎ危く病病より苦し世をくあり。

第二回

遺訓ふ依く賢童踢蹐を知る
旅櫬を迎て義士母子を憐む

却説その朝小六九郎又只親の病着の平愈を祈らんとそ。鎮守の神社へまゐり一次。

英直の母屋を呼て扶起さるそ尽ふ枕を生非れて權く四下ふあるをつけさせて再側ふ招
く近つけ。然らそも細り一声を低めそ渾家ハ何とぶらん右少将主従の底倉ふそ斃されぬ。
その日既ふ分明なれ。宿念六日の昔蒲ふるたなるそれをそ俺露命をそ旦夕ふ逼りたり。
俺てむるくるるぶ。何人ハ亦郎君を一日も金吾藏まゐ。今の世の人心新田の餘類を
樹を伐殫一草を芟竭そも素生さんとのを思ふらんとを隱形五遁の幻術隱蔓を
とも。この夜の下ふ小六殿を潛せまゐらせ。を奉ふ一個の知己あり。その這假名
川の驛より路程遠くもあり。相摸州藤澤の郷士史野上史著演と吸做まゐり。
曩歳俺少くし時鎌倉近く潛ませ。敵地の虚実を探をとの主君の密説を稟
なりそ藤澤ふ旅宿し且く逗留まくり。比那著演と邂逅て文法を隨ふ学
意中を諦せ。より遂ふ捨ぐ思ふ入あり。そ稿ふ義を結び。異姓の兄弟ふ成
あ且このように昨きそも益ふ。と思ふて渾家ふ知せ。二十餘年歴々ふ他を義ふ

叛くものあらば俺死骸と共に小六殿を倶しまゐらせて冥途へ赴くべしの故に病苦を忍びて著演の與へる書翰一通寫め措き那宿所に到らんとするを主人は遽与一郎留られと凝こるに小六殿の主君の御子なりとて若演の匿まそれ是までのごく俺們の見えとのうと勿論又小六殿のもあるべし福祿の中よりも人に被く育まゐらせられば只俺們を実の父実の母とのみ思ふべし二親のうへいかに新里の餘類の係とぶものを告げ知り召れも痛に限りもなきを九歳にして世を潛ぶ身の情由をのみ知せまゐらせ後々の用心に備へまゐ不覚を攪せあるとあらんあの義をあるべしの却介後は小六殿の年十五六にあらるべし竊に素生を告まゐらせ御家大殿右少将の遺ものの系圖の一巻菊一文字上ふええう。その餘の東西も送るべ遽与一郎ねるとそ渾家の功績良人に代り忠を自ら久後潔心ひり及ぶべしと方すに収め洗ひあるとの返ひるべ今般の遺言一句毎に息迫ても病苦に屈せず忠義の魂枕邊近く措せ

た所行果衣の裡より一件の三種ところ出さしに封書と共に遽与もそ母屋に涙に沈くと慰め難一後の事のれ一身を云云と汲てひで膳向心細輪の田井のあもを易くの世に沈てひ沈身の往方別れ悲し生死の海に沈べの岸とあ底量のあく千仞成ぬ歎に俯論ミ一ひ頭を揺て宜ふの悲皆旦疋忠義の為に理るの沈ものあるとよあるとあるとも然も覚期に及ぶ病着に搗く加えて底金の凶計の洩ゆえより其餌もあるべ世に長くとと思ひあるべ葉るに仕ぶ果敢る浮世の口順も死て千年を歴さんとる生て一日を勝るとの沈の孔あるとの沈べ及ぶまでも將息に粮育君のあ為に年を延んと思ひ心より沈て年来の氣質に似げるべ仕るべ返らるを思ひ出さんハ思ひ痴に仕れども信夫ぐ沈ものあるべ在ら今茲に九歳に折ゆを慰めて親の為に殺るべ沈に世にまり形一もあるべ火の筑石の蓋て処欲京師のそら欲直愛のなりかさひて沈べ絶てあ衣着に親子の縁に沈と哪つを

英直推林にめさ。益なき諍言人や咎とも信ずるハ不便なと思ふ身ハあらねども忠臣ぞ親ども忘るゝ况幼稚き女の子のあるを今ハ暇の哀別離苦ハ悟道の捷径ぞかくてそ後世の三を念じ。俺樂んで死を俟んや。主君の讎言る藤白奴を斃さざるその怨黄泉の客となりなんとも朽ずべく。九の世を過るとも忘るゝよしなき怨をなれども定業なれバ力なし。九のかへらぬ世の間に快なる三種を取蔵めざると励されても得べかられぬ妻は骨も窓く引よせなる行狀へ舊冒の如く。東西とり斂れて引結び中帯被る韓組紐の断れて短くなりぬれど長き別れを後に知る言の端さへ表れて燈火滅んとするときに光りを増せし例に似たる英直が病痾間もやそ盡せし迷訓を健気なる然程に英直ハその夜丈より胸痛の病苦ぬさて劇しくなりて。又血を多く吐しが。母屋小六丸も共侶に胸を苦しめ憂悶て湯薬をあたへ薦しかども英直哀果て水粒共に咽下らず次の日の曛昏に一声叫び呼吸絶けり。悲しさいふべしとも豫より覚悟しありぬれども又今ゆうのあるに覚し。母屋小六丸の哀傷悲泣ハ譬るに物なかるべし泡

沫夢幻の浮世を陝きて生死流轉の苦海に漂ひしが来も果ぬ旅衣を経帷子に脱更て徃て返らぬ人の数に入て。人を留めて難し。妻ハ孤雁の伴侶に後れ子ハ赤祖猴の林木に離れし至悲断腸の血の涙呼べど答も山梔子の花塗椀に白粥の枕まで送る一会もあさく果敢なき夢の跡なれバ思へバ身ひとつに切てる歎きを知る。只白に絆訪ふ者ハなきのみか赤只逆旅主人の正首に慰も不慮にお宿を致せし夜より連れ丈子の長き病著竟に痊りぬいせしで遠間で身まかりたまひしが流後悔も推量られて不便のふでもゆかれ亡骸を本驛に葬らんとおもへバ地方の法あり私にハ執措かたり。驛長の指揮を稟て左も右もつかまつらん或ハ是より近きところに由縁の方ざるなどあらでその人許亡骸を引とらせんと思ひぬれバ驛長に報るに及ばず。それハともかくも任せんとのことに母屋ハ涙をおさめてあらためて趣きたるゆゑ一河の流を汲むとも一樹の蔭に寄るもみな是他生の縁しぞと世の中いへども殊にかゝる人の病中より大かたならぬ厄介ありしかるべき甲斐もなく遺骨を

身まかりしハ過世のそのことにてそあらめ知らずとく女の身ひとつ十才にも足らぬ女子ひとり
なるに郷知らぬの旅宿にて係る不幸にあひけれバ心細さを察しあれバ此後とてもなほ具て
高畠敵なるに在りてみひらを葬りのるハも亡夫の遺言あり這首よりして遠くもあらぬ藤澤
にて亡夫の旧由縁のあるが此名だゝるハ這間にも修ゆゑとてもあらん野上忠太と喚るゝ
地方に世を經し郷士のありし年来疎遠なりしかど適て頼まバ身に引請て葬る吉文母子の
うへさへ等閑にハせじと思ふべけれど翌ハ夙めて亡骸を行轎にうち乗して藤澤へ倶して也まほし。
此の義を憑思ふ侍るなりといふに主人ハうなづきて野上大人の高名ハ這間でもなまめるゝ。那
人さまハ大かたならぬ慈善にして侠気あり。戦死の髑髏一萬余級を葬りあへし仁者に
それ世にこれに優る由縁あらんや。然る人さまの近郷に在りと知りつゝ病中まゐらで生涯遣り
のあげりけん憂苦に他吉文を送れあへし。女儀の脱落狭是非に及ばず然らバ仕はべらん。
箇様々々にあるへと翌の准備を助言しつ快桶といふ柩をその曛昏に買はらしく。

その身も軀をよ得ゆで英直の亡骸を件の柩に斂めける。隨而母屋ハその通宵良人代
柩をうち戍りてゐる。その甲夜間に小六丸ハ密出びあらに示あふ。阿兄ハのきと知ざるべし。爹々公ハ
新田の餘類にて脇屋殿の御家臣なりし也。ゆ御主君少将さまの陸奥を立落あひし
折愁に執送されて今在処も知らであり。今茲ハ相模の底倉に御座ませバ
実ハ那処へまゐらんとて起行あり。甲斐もなく一日路に足らぬ程にして病痾の為に推留ら
れ。本意を遂遂で御主君ハ底倉にて斃されるハ。爹々公も遂に世を逝りあひて。絆のなに
及べる御尚に依は報らし。野上殿のゐるハも吾侪をしらぬ対面せぬ名を残すも這回まで
なれども。昔歳爹々公と義を結び。弟となり兄となられし好あれバ骨肉の親類にも優
るて憑しからん。那処へ由縁て身を寓せよとの遺言あらんものハあれども世に憚る親子ゆゑ人を
人に知られて絆の難義に及ん日のあらバとへ決めがたく。小六ハ年尚十にも足らぬ総
角なれバなれらのよしを知らで過せしかど。竊に示して覚期をせよとのれしてもよくぞ。

外出を洩し、ひそかに生るとても、小六九八落る涙を振絞て頭を擡て貌を更て仰うけなりけれども脇屋殿の陸奥へ落させぬ、比いも俺四五才許る時ありつゝ果ぬ夢の心地して人の噂ありしを親の故主でとせを知ざりしを悔けれ今ぞ思ふ是ぞ

るべう答々く公のうへ思ふ者ども多く那処へ集り是者て俱に戦殺せるべく左ても右ても存命ざと

ゝ本意ふ恨せぬ人ふ敷ぞ生送りこる。俺身も恨ぞ。故主の讐敵那藤白を

討捕て神灵を慰めなんと思ひ侯せぬ。とのゝ腕を扼まび母屋ハ吐嗟と推禁めやよ

声高人のゆゆしく獅子ハ生れその日より百獣威伏の勢あり。蛇蝎ハ僅ふ一寸なるも物を呑ん

と欲する氣あり。とのゝ俺ハ倍て逞く雖豆を敷ん。とのゝを叱る事あれ

ど。潜れぬ世を潜ぶ身ふ出来ぬ辛ひ事こゝ及ぶを思ひ起て氣色を人ふ悟らるゝ。親

ゝ身さへ亡ふべ。不覚ふめそのとのゝと微られて小六九ハ過言るゝと思ひけん誠ふ然りと

応々。あゝ口を鉗こそ。然程ふその夜さ母屋ハ主人ふ儆賃と醫師の謝銀柩の價

行轎の損料まで。ひとつ隨ふ送る。還て後ぞと思ふ。俟とゝ言ふ夏の夜の向明とを

る比ふ豫て宿より誂る。両個の轎夫ハ時を違へず。平常筬輿をうち肩担て来て

焦々と呼ハ母屋。主人ハ恥て指揮て柩を擡起させ。件の筬輿ふ乗せなども是ふ

朱ふ母屋小六を早飯を薦られて。弁一膳ふ向ひ。とのゝ俺ふ折ふ著ふ進ず。身装

ちつ。行裏ハ筬輿ふも附け。親子も駝ひ。草鞋を引提て少ると主人并ふ家人

ゝ。女婢ハふも別れを告る。口誼も脇のを寒ゝ。辭寡く哀情ヨ〻ゝ。ひる程ふ夫ハ

明て茂林をとゝ〻ゝ鳥の声も常ふかゝ。心裏哀く涙の跡のゝ。去向ハ僅ふ坂

東路。六町一里二十里ふ足ゝ。ほふ最も日長ゝ比なれば。まゝ亭午ふ。ゝ間ゝ件の筬輿を

引添ふ。とも藤陣の御ふ来ふ世ふ知られる野上の宿所の隙ハ。べうもあ。母

屋ハ筬輿とゝ。卸さ。故意後ハ。ゝ我ゝ入ゝ。両三声呼ハ程ふ軌次の若黨ゝ

べ。応と答て立出ゝ。登時母屋ハ小腰を折て。奴家ハ這里の御主人の親類某甲が

妻子ゟれバ密ゟ遇ふことなるべきよりありて。尚総角なる拙郎を倶して。かへるとなき事の意ゟ禀
しかへしとふあの件の執次人ゟおろ〳〵果て退きつ且して丈ばかり来ゆ誘ふをもてそ先ゟ立て容
房へ案内をしけり。當下母屋ゟ小六丸を後門ゟ前ゟ送り措きて英直の柩を成させその身も
引れてその侭ゟ客房ゟ赴けバ類娘なるべし少き女子の茶を看めるとしけるが有徒し程ゟ
著演ハ執次の若黨の徒に乍ら早しと独りゟろゟ訝りて俺ハ他御ゟ親類ゟ什麼何
人の妻なりけん。おてろるぐ容ゟてそ立ちもの。ゟら然しき気なく且客房ゟ案内をさせて茶を
看めさせるまでも程ゟ遑しく袴を穿ち一刀を壷ゟして出て遇んとて折隔竟の際
より間窺るゟのまま訝ら婦人今對面して詳ゟ問ゟまあるべからず俺疑ひを解くより
あらんと思ひゟけれバ咳ばらひて客房ゟ入りて杈母屋ゟ對ひ其の某則野上吏著
演でけれ。よくてそ訪せ給ひたれ親類の妻子などと報られしを當面ゟ向ひて禮ゟ叙て吾今
まで對面せしとなければ何処の人ゟて在ますらん聊疑惑るゟゟ願ふハ名告らせ給へかしと

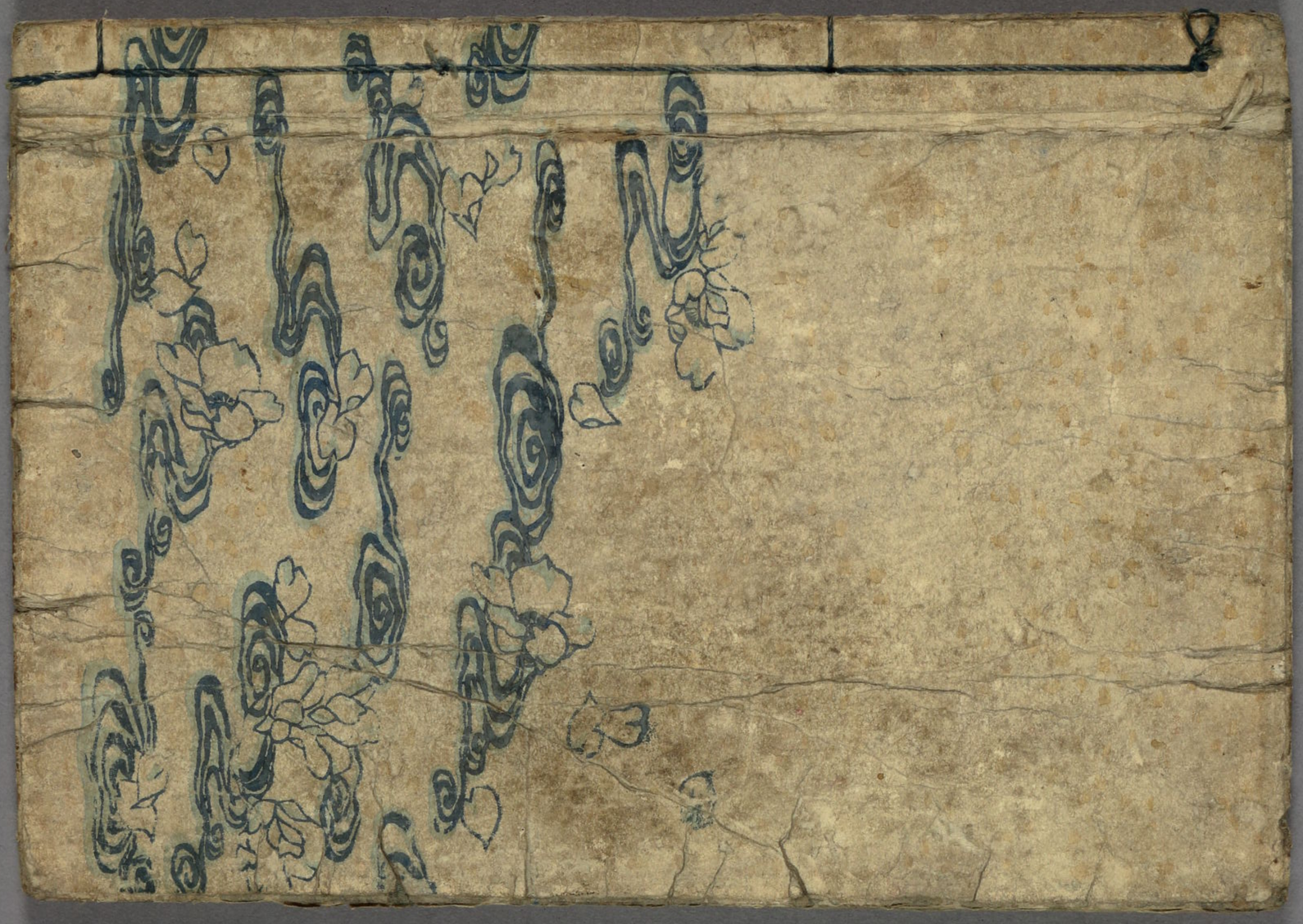
いわれて母屋ハ四下を見かへりあん疑ひハ理りなり人情ゟ生ぐ〳〵世ゟ憚りのよもあれバぞと先
礼ハとかくもいハまづ名告りてより出んその義を察しあるべし。といふに著演頷きてそゟ
然ゟてもあるべからん俺家の奴婢們ハ貪腹心のものなれバ洩さじとても方ゟ〳〵四下に人なき
ねしもなく示しあることを見てぞ問れて今ハ隠ゟ隠むべくもあらず。されバ奴家ハ父世の外を膝を找く
耳へ口を寄せ奴家ハ年来陸奥なる楫鎖の里ゟ僑居せし館大六郎英直が妻ゟて母屋と
喚るのかば後那地の閑戦敗れし折良人英直ハ故ありて主君ゟ別れ奉りそれより以来あん在
処を知るよしなけれバ心ゟ不楽て五稔あまりを過せしゟ今茲ハ相模の片山里ゟ御座ますよし伝へ聞ぐ
いろで主君の見参ゟ入らんやと思ひ起し奴家と今茲九才なる獨子小六を携て猛可ゟ逆
旅の准備を整へ相模路を投て急ぐ程ゟ武蔵の假名川まで来ゐるその夜ゟりこそや良
人ハ胸痛の病着ゟ臥て意なるも假名川なる客店ゟ逗留の日数を其首ゟ重ゟり
晦近くなりし比世の風声ゟ隠れもなく主君の人ゟ事あゐけりと傳へ聞けれバ良人の仰天是より

病苦も初め信じて這恨なる方ありけん血を吐くと雖ども後僅か二日にして竟に息絶
たるあの終焉の前一日聊病病の間ありて折の送られしを三十稔ばかり前の比良人を
主君の仰と禀て這地に来て逗留せし折恁々の古文書より編み出せし義を結ぶ弟と
ありし兄と言られ其の縁の趣を初て奴家に説示して俺と那人とかくの如く素より異姓の
兄弟なれども相別れより天の一方山河千里を隔てつゝ年来音信なければ胡越のごく過
たり然れども野上生の義に背くべきもあらず俺死骸を撫で那黒に到りそなたより送り
しと忘れぞ汝們母子を憐まんと那人の戰死の髑髏一萬餘級を購集せ其骨を
埋える信実慈善二人と得べき海内一の使者今の世にて英直と妻と子共に憑ん
の那人なりと誰やらん這義をありしかと叮嚀に送言ん病苦を忍びて寫措き書
翰をその折遞与されしを疑さず漏るとも其を知られぬてんで御庇を仰ぐのみとの
声曇る袖の雨蓑代衣にあらねども照る日に疎き世を陝布の行衾をうち披き英直が

送りたる那一封を遍与されしを著演いまだ一の緯ひとつとして記憶いまだ素より考
ず情由なれども且その書翰を受とりそれば正く標識に野上史殿なるまゝ新田餘類
館大六郎英直とあり躰て封皮を推折そ披てそれば白紙に訓点を限りもなきに然
貌のそさまくとそ尽なく巻竜く肚裏なの多く英直俺と一面の交りあるよりあく孫
とも俺行状を偽そ妻子を託せと欲するに書記をべたりのるれば標書なの姓名を
写して白紙を封せ一いの紙ハいのに優るとの苦し紀意中を示せしかるに然ほど其身の姓
名に新田餘類と題書をるハ忌憚るべき系生を隠さば悔あるせどもの赤心なれぞの本
心を妻子に明々地に知らせぞと異姓の兄弟なるとのに職めて恁々と俺に對し告
さまくいの白紙の状の自注を世に憚りある人の妻子と知るとのふとも義の為に後難を辞せ
ぎ七必よく扶持べき著演とのられけん倘今べいのに旦定なるのるに及んべ少くがべ
英真脇屋少将義隆朝臣の家隷なるとと疑ふ俺大父著佐大人新田左中将

ひて。元弘の功ありといへども義貞亡さるゆゑに世を憤り退隠せしより不肖の俺身に至るまで出で足利家に仕へざりし那英直いまてのよりを知りくるや知ざるやそを左まれ右まれ今よりの母子と家に留めそ。覊旅の難義を拯ぶに未見の知己に背くべく父祖の遺念に違ふ似て嗚呼小弱と立地に寄思をとゝ母屋に對ひて目今示談せられる。縛の趣実に由あり。館生とハゆゑ一時天地に拉ぎ義を結びて竊に異姓の兄弟みなりけるのと這郷へ程遠き假名川の旅亭に病々身まかりたるとや告も来たりけ只一度も訪ひ慰と長き別れに成る送臧さを猜ゆゑ非如自筆の書翰をとも。その妻その子に訪ゆゑ強面くゆめ疑況その終に臨て恁叮寧なる一通を送されこれ今に疑べくもあらざり此も小意あるゆゑ母子のうへ茸演ず身に引受て生涯疎略もぞ〻ぶ杖も柩と子息を何処に送しゆゑ初ち側に引著措ぬ世で俺に隔あるぞたやと世に憑ゑ美引れる人の誠に又袖濡らを母屋に鼻をちかて年来良人の疎遠なりし舊契に違はせゆゑ世に美へたる応に歎の中の歓ひを。良人の為に。

見に優なる追薦に亦あるもあらざる。小六を柩と成らしと後門前に送し措ぬ縛恁恁と報知せるに。さそ辱く思ふらん快歓ゆゑとの立を推林に。やとゝ雲時這首に坐せよ俺者に礼服に更めて倶に柩を迎へと舞せ〻く説示しと堂〻そう鳴らせば一個の若黨応をとゝ遽く来ける側に招ぬ近つけ。汝も知るよ後門前に来客あり。総角なる俺恁とそ。どうち成る旅槻に。ある日假名川なる客店に身まうとする俺親類の亡骸なるを今俺出て迎へ〻ば汝に老僕と共伍に荘客四名許なる。俺恁に恁々と報て柩と成れ快〻と言と追立遣りく母屋に對ひて目今ゆれ〻原如く某に奥へ退るそ。御母子来意の趣を前に知せべく。〻く衣裳を更へて柩を迎ず目(迎人)まてん且く元ゆゑと辞と奥へそ退るそ。登時若演に妻の晩稲に母屋親子の縁由と説示に件の機密とあらさま英直を午来の義に弟そとのその知と猛に服に衣

芝神明前
生絲問屋 記録貸賃
蓬莱屋吉兵衛

更させ。その身も衣裳を更めて復客房に出て来る。誘とそうの下母屋と倶に後門に出で来る。
程なく母屋へ先へ走りぬ。小六丸は若演が業引て入て柩を迎る縛の首尾を告ぐ。小六丸も
感涙に進むを覚えず柩を離れて。若演を迎へ出る。若演逆に礼を返して。遽く我を近
つけ和殿へ小六狭俺てそ。和殿の小父君若演と旅亭に入て喪を秘する哀傷艱苦を推量れば
痛ましいとも。あらべうもあらず。然れども。難くとも死する親の甦るまじきを愛して後栄を
揣るも亦是孝ぞ。住へ猶子のごと。礼記は本文見えたれば。若演を入とおもふ。俺も
亦子と思て艱育せん。うべ後生をたのべと慰められて小六丸。恭く拜し見る時の不祥を
ムかるに。陰ふるべの教びを述る言葉の感るも。暁に涙に孝子の情状年才実停と夫人の進
止は若演に且感て且促て荘客門に指揮して柩を乗せる行装を受取て門内へ除
樟入させけり。是よりの下若演が謨る趣甚麽なる。その辨分を聽給へ。